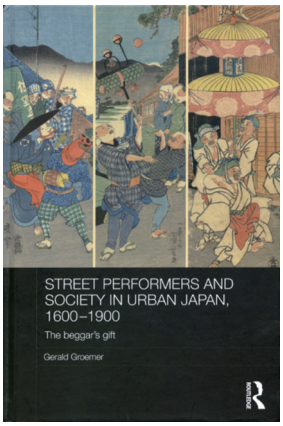
書評

ジェラルド・グローマー『大道芸人と日本の都市社会　一六〇〇～一九〇〇年――乞食の贈与』

Gerald Groemer, *Street Performers and Society in Urban Japan, 1600–1900: The Beggar's Gift*

マーレン・エーラス



Routledge, 2016

江戸の大スターは歌舞伎役者だけではなかった。十八世紀には香具師（やし）の松井源水が曲芸で評判となり、将軍の前で披露する機会さえ得た。この十八世紀の前半には、乞胸（ごうむね）（大道芸を生業とする集団）の松川鶴一が歌舞伎役者の物真似などで人気を集め、その後継も代々江戸の盛り場を賑やかしつづけた。そこまで有名になるのは稀だったにしても、江戸には彼らの芸能を培う生き生きとした大道芸文化が存在し、上手下手を問わず無数の芸人が次々と新しい芸を生み出し、歌を作り、大道や広場、寺社の境内、門口の前で江戸の武士や町人などを楽しませた。こうした文化を詳細に描き出し、江戸の社会に位置づけるのが本書の狙いである。

著者である民族音楽学者ジェラルド・グローマー氏（山梨大学）は、このテーマを社会史的な視点から取り上げている。大道芸に日本の文化的本質を見出そうとする一部の民俗学者に異議を唱えるのみならず、その大道芸を美化したり、洗練された日本の古典文化として評価したりすることにも否定的である。大道芸人の多くは江戸の下層階級に属し、卑しい身分で貧しく、大衆の好みに応えることでその日の糧を得ようとしていた。著者は、芸能の腕を下層民にとっての一つの社会保証のようなものであったと捉えており、大道芸と貧困の関係を明確にしている。だが、こうした貧しい芸人たちは勧進元や大道具の所有などに束縛されていなかったがゆえに流行の変化には敏感で、エネルギーや想像力に溢れ、江戸文化の原動力となっていた。彼らは幕末期に来日する外国人さえも魅了し、八代目の松井源水などは一八六六年に海外に渡り、明治期に西洋諸国を巡業する手品師や曲芸師などの先駆者

となっている。

本書が取り上げている芸能は非常に幅広い。節季候や鳥追い、大黒舞、猿曳、念仏踊、歌比丘尼、虚無僧、住吉踊、かっぽれ、歌祭文、太神楽、三河万歳、越後獅子、放下、居合抜き、からくり人形、独楽回し、物真似、講釈、読売、蛇遣いなど、その内容は多種多様である。しかも著者の関心は決してこれらのみに尽きるわけではない。すでにこれまでにも、辻能や寄席、弾左衛門（関八州のエタ・非人身分の頭領）、願人（乞食坊主の集団）などについてもそれぞれ論文を英語で発表しており、瞽女についても日本語と英語の両方で出版し、江戸の大道芸や芸能文化の専門家としてつとに著名である。今回の著書はこれまでの研究成果の上に成り立って執筆されている箇所もありはするが、江戸大道芸の全体像を示すという独自の論旨を持っている。著者は、もともとは乞胸に関心があり、その周辺を調べていくうちに次第に研究対象が江戸全体の芸能文化に広がったということだが、これほどに詳細で幅広い江戸の大道芸研究が西洋言語で出版された例は他に類をみない。なお、英語で出版することの都合上タイトルには表れていないものの、本書は江戸に焦点を絞っており、江戸という街を、諸集団や流行が影響し合い競い合ったマイクロコスモスと捉えている。

本書は、よって立つ史料基盤の広さにおいても際立つ。英語圏の江戸文化研究は文学作品や知識人の記録などに依拠しがちだが、著者は「江戸繁盛記」、「守貞謾稿」、「宴遊日記」など知識人の視点から書かれた文献はもちろんのこと、江戸町触集成や浅草寺日記、南伝馬町名主高野家日記など、芸人や下層民の法的・社会的状況を浮き彫りにするような行政史料にも目配りをし、頻繁に引用している。加えて脚注も精緻で、日本語や諸外国語での幅広い先行研究を踏まえている。

本書が取り上げている多種多様な芸能がどのように整理されているかが気になるところであるが、まずは章立てから見てみよう。第一章「可能性の条件」では大道芸の社会的条件（主に経済的背景や身分制）が説明され、第二章では賤民（特に非人や猿曳と弾左衛門支配）、第三章では宗教者の諸集団、第四章では乞胸、第五章では香具師と、諸芸能をその支配系列によって分類している。第六章では、明治時代に入り、それまでの江戸時代の大道芸秩序を解体させた「不可能性の条件」を探っている。江戸時代の都市大道芸を、中世とも近代とも違う固有の文化として捉えているが、その要因を江戸時代の政治社会構造＝身分制に見出している。

江戸時代の身分制は本書の第二のテーマといっても過言ではない。それぞれの章が賤民または宗教者、乞胸、香具師などの身分的位置付けを明らかにし、集団同士の争論などにもかなりの紙数を割いている。芸能以外の渡世（例えば乞胸による木賃宿経営）や

御用にもある程度触れている。賤民や乞胸の章では、幕府に提出された芸能の書上（弾左衛門の河原巻物や寛政年間の乞胸家業書上）を取り上げ、それぞれに登場する諸芸能を紹介する端緒としている。しかし、それだけでなく、書上の内容を文面通りには捉えず、争論の武器として評価し、それを身分制の文脈に位置づけている。

本研究において大道芸の解釈に身分的な視点を取り入れたことの意義は大きい。著者は、芸を披露するロジックが支配系列によって異なっていたことを指摘する。賤民の場合は、下賤なものによる厄払いが根幹にあり、それが次第に様々な門付け芸に発展したという。宗教儀礼は、踊りや歌、語り芸などを伴うものが多く、それらの芸能は儀礼の力を高め、江戸庶民の信仰を高揚させる一助となったという。確かに宗教をもつぱら建前としてのみ受け止める芸能者はいたようであるが、宗教と芸能が絡み合う側面もあり、それゆえ著者は、大道芸の宗教性が江戸時代に薄らいだとは必ずしもいえないという大事な論点を提示している。乞胸は、当初は門口や大道などで活躍していた。彼らは、ギフト交換の互酬性を利用して「最初に贈った者」として観賞者に恩を着せそこから代償を引き出していた。それが次第に筵張（むしろぱり）や芝居小屋でも披露し、入場料を取るようになった。本書の副題ともなっている「the beggar's gift」とは、大道などで披露した場合に発生する交換行為を指している。香具師の芸は、名目上は「香具」（実際には楊枝や薬など）を売るための人寄せに過ぎなかったが、やがて香具師の事実上の本業となっていった。このように、芸をめぐる交換行為は本来、身分集団によってその論理が異なっており、単純に売買されるものではなかった。しかし、次第に大道芸の商品化が進むことで、やがて明治時代の芸能市場を準備することになった。

本書の中で著者は、芸能が身分的範疇に収まり切らない性格を持っていたことも強調している。例えば、宗教的芸能は必ずしもすべて宗教関係者によって披露されていたわけではなく、逆に芸を披露する宗教者が宗教儀礼の名目で様々なジャンルに進出してもいた。非人や乞胸、香具師などは相互に影響を与え合いその縄張りを侵食し合っていた。そして、利権をめぐって争うようなことになった場合には、同じ芸でも大道で見せるか、寺社の境内や寄席、門口などで見せるかで興行権が分割されるようになった。比丘尼の流行歌や願人の住吉踊などは歌舞伎の舞台に登場する場合もあり、逆に歌舞伎の台詞が乞胸に反映されるのが一般的だった。素人の町人が大道芸を習い、趣味や稼ぎにしたり政治批判に利用したりすることもあった。著者は、芸で稼ぐ非人や乞胸の女性にも着目し、女太夫や比丘尼などの活動を詳細に描いてくれている。流動的で多様な諸芸能が江戸の身分秩序の中でどのような仕方で存在し、どのような交換行為のもとで表現されていたかが

明快に整理されている。

著者は、ともすれば幕府の都市支配の無能さや庶民文化への無理解を揶揄する傾向があるため、しばしば身分制に基づく支配構造には無関心であるかのように誤解されがちだが、決してそうではない。江戸時代の支配原理は的確に捉えられており、特権や支配をめぐる諸集団の鬩ぎ合いも重視されている。その理解は、英語圏の江戸文化史にしばしば見受けられるような固定した身分理解をはるかに越えている。ただし、気になるところがないわけではない。グローマー氏の問題意識は、ここ三十年日本で盛んに行われてきた身分的周縁研究と重なるところが多く、にもかかわらずそれを取り上げたり、立ち入って言及したりしていない点は疑問が残る。例えば、吉田伸之氏の二〇〇三年の著作『身分的周縁と社会＝文化構造』（部落問題研究所）である。吉田氏は、江戸の願人坊主や乞胸、香具師などを分析し、第三章の「「江戸」の普及」では芝居地、香具見世、寄席からなる、歌舞伎芝居を中心とした江戸の芸能文化構造を明らかにしている。そして、その中での文化的伝播をたどり「民衆文化へゲモニー」という概念を提示している。その概念に対するグローマー氏の反応をぜひ聞いてみたいところだが、筆者は吉田氏らの研究を表面的に引用してはいるものの、本格的にそれらの議論に取り組んではいない。

それだけではない。芸能の社会構造だけでなく、身分制全体の構造という点でも、研究史への位置付けが十分になされているとはおよそ言い難い。一九九〇年に始まった身分的周縁研究は、芸能者集団の分析を一つの出発点とし、それを元に身分制に関する通説を問い直し、近世社会研究の理論的枠組みを大きく変えたことで知られている。しかし、本書にはその研究成果は反映されてはいない。例えば、第一章では、身分制を「身分」と「支配」という概念で説明し、その両方に依拠しながら叙述を進めているが、本テーマに関する一連の先行研究では、さらに「身分」と「職分」を区別し、身分と職分で支配が異なる可能性に着目し、身分と職分の分離を身分制の解体要因とも位置づけてもいる。それに対して本書は、乞胸については、職分は弾左衛門支配、身分は町支配という事情を指摘しているものの、身分制全体の動向と結びつけていないため、その意味はいささかはかりがたい。もう一例を挙げれば、身分と空間の関係、特に寺社境内や広場などの空間構造や特権の株化が身分制研究の眼目の一つだが、本書の場合、空間と興行権の関係を頻繁に論じているにもかかわらず、それに先立ってこの問題の理論化に取り組んでいる先行研究に触れていないのはいかにも残念である。非人の芸能活動についての紹介も興味深いが、それを彼らの身分と結びつけつつ論じるなら、先行研究を踏まえた上で非人の社会関係（特に勧進権をめぐる関係）全体に説得力ある仕方で位置づける必要があったであろう。

このように、身分制理解の点ではいささか先行研究に遅れを取った感は否めないが、とはいえさまざまな芸能を具体的に紹介し、ジャンルや集団の束縛、貧困との関係を強調しつつ、諸芸能の創造性を際立たせることに成功しているという意味では極めて魅力的な研究であると言える。楽譜や歌詞、絵なども挿入し、江戸文化の一角を見事に蘇らせてくれている。